

▶夫のほかにも恋人あり 男が決めた法律はこれを罪とするが…… (朝子, 1914年) ▶まだ見ぬ世界にあこがれる 忍従の生活くだらない (24歳 北国の青年, 1917年) ▶在米の男と写真結婚 8か月も手続きなく (鶴える女, 1921年) ▶罪の子を宿し 満州へ行こうかと思う芸者 (24歳, 1933年) ▶貧しい両親のため身売り話に悩む 5人兄弟の長女 (18歳 悩める者, 1934年) ▶恋人が兵役にある間 縁談 (21歳 苦しむ乙女, 1936年) ▶復員してみれば 妻子すでに親友のもと (35歳 豊島古田, 1949年) ▶希望は海外移民 脱したい「家」のキズナ (24歳 群馬一夫, 1952年) ▶米軍人から求婚されて… 家族は世間体と経済上の理由で反対 (19歳 埼玉H子, 1959年) ▶学生なのに女に迷う 忠告しても別れぬ東京の長男 (富山一母現, 1960年) ▶学生運動に走る娘 就職も困難 (埼玉H子, 1968年) ▶団地のみんなが迷惑 出しやばり夫人 (34歳主婦 神奈川T子, 1970年) ▶ハゲ族に光明ないか 植毛考える2児の父 (40歳 埼玉K生, 1976年) ▶同性に心ひかれる 定年目の男 (山形S生, 1979年) ▶モーレツ夫、体に変調 仕事続けるか迷う (36歳主婦 東京T子, 1983年) ▶中学でいじめられる 無視され、成績も下位に (中3女子 東京U子, 1987年) ▶上司がセクハラ パストを触られ暴言を受ける (40歳代 神奈川J子, 1993年) ▶不調の就職活動に落ち込む 両親の説教が追い打ちに (大学4年女子 東京T子, 1995年) ▶80歳代夫が浮気、私に嫌がらせも 何かと「出ていけ」 (70歳代主婦 千葉U子, 2002年) ▶31歳長男が引きこもりに 自力回復待つのも限界 (57歳主婦 兵庫K子, 2004年)

「人生案内」過去の主な回答者 ※「内容は一部省略」



賀川豊彦
社会運動家
(1931~33)



落合恵子
作家
(1984~2007)



平林たい子
作家
(1949)



藤原てい
作家
(1984~97)



鎌治千鶴子
弁護士
(1972~2003)



藤原正彦
数学者
(1998~2000)



沢村貞子
女優
(1982~83)



森英恵
ファッションデザイナー
(2005~07)

* 過去の相談は、YOLにもっと詳しく

95年 悩んでできました。

人生案内

回答者 ともえ戦

読売新聞が、日刊紙初の本格的婦人面「よみうり婦人付録」(現在のくらし面)を設けたのは1994年4月。1か月後の5月2日、「人生案内」の前身となる「身の上相談」が始まった。当初は記者が回答し、本社での面接相談も行っていた。以降、一時中断したり、タイトルを変えたりしながら、

日中戦争が始まった37年まで続いた。49年11月に「人生案内」として復活。「身の上相談」時代から95年、世相を映し続けている。現在の回答者は12人。このうち、樋口恵子さん、出久根達郎さん、増田明美さんに、互いの悩みに答え合う「三つどもえ人生案内」を試みてもらった。

Q デパートで洋服を見て、店員さんで「マラソンの増田さんですか」と言われます。電車の中で、ランニングのように腕を揺るまわすのを、引退してももう17年になるのに、今も名前の前に「マラソンの」と付いてしまいます。私なりに他の分野にも挑戦してきたつもりですが、17年前から時間が止まっているようでもありません。しかし、マラソンを卒業し、解説の仕事もスバツと辞める勇気もありません。人生の折り返しを過ぎ、これからの走り方がわからなくなっています。あつ、またマラソンに例えてしまう自分がいます。

「マラソン」から逃げられない



増田明美さん
(スポーツ解説者)

A 樋口さんにお答えします。若い頃と変わらず怒りっぽくいられるなんて、体の中に力がみなぎっている証拠です。もしも爆発しそうな時は運動で力を発散することをお勧めします。ウォーキングもいいですが、時には重い宿丸を力いっぱい投げてみる。さっぱりします。しかし、年を重ねたら穏やかな性格になるべきなのではないでしょうか。今、しかる大人が減り、わがままな若者が増えてきました。日本にはまだまだ樋口さんの怒りの力が必要です。安心立命の境地は旅立つ寸前で。

A 増田さんにお答えします。一芸に秀でた者の、これは勘車です。ものは考えよう、この勘車が増田さんの原動力なのではありませんか。マラソンだけではないぞ、と反発し、他の分野でも成果を残すのだ、と発奮の起爆剤になっているはず。一律的評価に甘んじないところが、増田さんらしくステキです。私こそ「人生案内」の出久根さんと呼ばれます。よし、人生案内的小説を書くぞ。おかげさまでそんな気になりました。

出久根達郎さん (作家)



Q 私が古本屋を営んでいた頃、老夫婦から写真アルバムの写真を相談されました。プライベートの写真で、ご夫婦には子がなくて残しようがなく、かといってゴミにするのはためらわれる。当時は私もまだ若く特別の助言もできませんでした。写真の処分についている方は、今も少なくないでしょう。庶民生活の一資料として、受け入れてくれる施設はあるのでしょうか。私も遺囑後、身辺整理をしています。最後に写真で悩まそう。人に引き取ってもらえない物の処分方法、捨てるのは簡単ですが、何か良案ありますか？

昔の写真 処分できない



樋口恵子さん
(評論家)

死んでも許せぬ人2人いる

A 出久根さんにお答えします。私は今、1冊のアルバムに、誕生以来わが人生のハイライトの写真を選んでいる最中です。介護施設に入るとき持参するように。では、それ以外の写真を捨てるか、というと私にはできません。今の家に他のガラタと共に残し、死んだらブルドーザーで家ごとつぶしてもらおうつもりです。とはいえ、思い出の写真。どこかで「針供養」みたいに、写された人の人生の日々をたたえ、祈りをささげてから処分できる場所がほしいです。

Q 若い頃から怒りっぽく落ち着きのないタチでしたが、老いては寛容でおつよつよな長者の風格を持ちたいと願っていました。ところがその年齢に達したのですけど、今でも怒りっぽいです。特に昔の怒りが忘れられません。死んでも許せない人が少なくとも2人います。一方、昔忙しさに紛れて粗筋に扱った人に対して、申し訳なさを感じます。謝りたくても相手の生死すらわかりません。このあたり人生100年型の老年心理学もつと発達してほしいです。若い世代からみて、こうした安心立命の境地に至るには、どうしたらよいでしょうか。